

# 助産師が捉える 40 歳以上の高年初産婦における 産褥期の課題と特徴

糟谷ちひろ<sup>1</sup>, 大原 良子<sup>2</sup>, 神谷 摂子<sup>2</sup>

## The Challenges and Characteristics of Older Primiparas Aged 40 or Above during Their Puerperal Period from the Perspective of Midwives

Chihiro KASUYA<sup>1</sup>, Ryoko OHARA<sup>2</sup> and Setsuko KAMIYA<sup>2</sup>

### Abstract

**Objective:** The objective of this study is to learn how midwives perceive the health of older primiparas aged 40 or above (hereinafter referred to as “older primiparas”) during their puerperal period, as well as how they view the challenges and characteristics of providing childcare for older primiparas.

**Method:** This study targeted 12 midwives with at least five years of experience in obstetric wards of tertiary care facilities who also had experience caring for older primiparas during their puerperal period. Data collected through semi-structured interviews were analyzed qualitatively and inductively.

**Results:** Midwives perceived the challenges facing older primiparas during their puerperal period to be as follows: “They become easily exhausted and their bodies cannot keep up”; “They are not emotionally ready to handle childcare”; “Their childcare techniques are awkward”; “They become easily isolated because they have little support”; and “Various experiences are intertwined because they are old.” The midwives also stated that “[t]hey stick to what they have learned through their long life experience,” but “[t]hey lose confidence and become discouraged after realizing that what they have been thinking does not work.” However, the midwives also noted that older primiparas could take advantage of their unique strengths and enjoy life after childbirth, stating, for example, that “[t]hey can adapt to life after childbirth because they understand their own characteristics and know what their challenges are.”

**Conclusion:** Midwives must support older primiparas by considering their individual challenges and characteristics and taking more advantage of their unique strengths.

**Keywords:** older primipara, midwife, puerperal period, challenges, characteristics

## I. 緒 言

近年、母親の出産年齢が上昇傾向にあり、35 歳以上の出産は 3 割を占め、40 歳以上の出産が増加している<sup>1)</sup>。また高年初産婦の割合は約 1 割であり、40 歳以上の高年初産婦も以前より増加している<sup>2)</sup>。

高年初産婦が増加する背景として、女性の高学歴化や晩婚化、生殖補助医療の発展などの影響が考えられ

る。また高年妊婦は、児も母体も合併症を併発するリスクが高く、自己管理や医療における厳重な妊娠管理の重要性が述べられている<sup>3)</sup>。高年妊婦の出産に関しては、30 代以降の自然分娩率は有意に低下し<sup>4)</sup>、帝王切開率が有意に高くなる<sup>4,5)</sup>と述べられている。特に、緊急帝王切開率は高年初産婦で有意に高くなり<sup>6,7,8,9)</sup>、中でも生殖補助医療技術によって妊娠した高年初産婦は緊急帝王切開率が顕著に有意に高くな

1 名古屋学芸大学別科助産学専攻 : Midwifery Major, Nagoya University of Arts and Sciences

2 愛知県立大学大学院看護学研究科 : Graduate School of Nursing, Aichi Prefectural University

る<sup>10)</sup>。一方、経膈分娩であったとしても、医療的介入が多くなるとされており、吸引分娩や鉗子分娩は、高年初産婦で有意に増加し<sup>7)</sup>、分娩誘発や促進を行っても、44 歳を超えると急激に経膈分娩率は低下する<sup>6)</sup>と述べられており、高年初産婦の出産はハイリスクであることが言える。

産褥期の状況としては、高年初産婦は、産後貧血および産後高血圧、浮腫及び尿漏れの自覚割合が高く<sup>8)</sup>、産後 1 か月時点で肩こり、腰背部痛、腱鞘炎が多い<sup>11)</sup>。また、マイナートラブルの選択個数も有意に高い<sup>12)</sup>。特に 40 歳以上の初産婦は、毎日行う抱っこなどの育児技術により、手首、首、腰などの身体の痛みを生じ、さらに児の泣きやぐずりで睡眠や休息がとれず、身体の痛みがさらに増し、疲労困憊している状況にある<sup>13)</sup>。そして、初産婦の産褥早期の育児困難感に影響する要因については、「心配、困惑などの育児困難感」は、高年初産婦の方が他の年齢の出産した女性に比べて高得点であった<sup>14)</sup>。さらに、ストレス反応を検知する唾液中アミラーゼ値は、高年初産婦は産褥 3 日目、産褥 5 日目に有意に得点が高かった<sup>15)</sup>。よって、これらの研究から、高年初産婦の産褥早期からのストレスの高さが伺える。

今後この傾向は変わらないと考えられ、高年初産婦への支援のニーズが一層高くなることが考えられる。中でも、40 代以上の高年初産婦は、これらの問題が顕著となることが予測され、さらに支援のニーズが高まると考えられる。

ハイリスク妊産婦である高年初産婦は第三次医療施設に集中するため、これらの施設で働く助産師は多くの高年初産婦への支援を提供している。高年初産婦の中でも特に 40 歳以上の初産婦（以下、超高年初産婦）は多方面のリスクが高まり、より細やかな支援の提供が必要であると考えられる。超高年初産婦に多く接する第三次医療施設の助産師は、それぞれの経験から自分なりの対象の年齢に応じた捉え方をしていると考えられる。しかし、高年初産婦に関する研究は支援を受ける側の高年初産婦を対象としたものが多く<sup>8, 12, 14, 16)</sup>、支援を行う側の助産師を対象としたものは少ない。そこで、今回、助産師が超高年初産婦の産褥期の健康および育児の課題や特徴をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とし、産褥期の超高年初産婦への助産師による支援を検討する一助とする。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究

### 2. 用語の操作的定義

高年初産婦：35 歳以上の初産婦

超高年初産婦：40 歳以上の初産婦

産褥期：日本産科婦人科学会の定義である産後 8 週間とする

産褥期の課題と特徴：産褥期の母体の身体的心理社会的な健康状態および育児に関わる課題

産褥期の支援：正常児（在胎週数 36 週以降の出生、かつ新生児集中治療室や新生児治療回復室へ入院していない児）を出産した 40 歳以上の高年初産婦への産褥期全般を見据えた産褥入院中の支援

### 3. 研究対象者

超高年初産婦への産褥期のケアの経験をもつ第三次医療施設の産科病棟で 5 年以上勤務する助産師

### 4. データ収集方法

#### 1) 研究対象施設・研究対象者への依頼方法

研究対象施設は、高年初産婦の分娩を取り扱うことができるハイリスク分娩対応可能な病院とした。県内のハイリスク分娩対応可能な医療施設へ研究協力依頼文書にて研究協力の依頼を行った。承諾の得られた 2 施設のうち、1 施設の看護管理者には、研究対象者の条件に合う 4～5 名程度の研究対象候補者の選出をお願いした。その際、研究協力は研究対象者の自由意思に基づくことを説明してもらうように依頼した。もう 1 施設は、その看護管理者の希望に合わせ、研究対象者の選出は、便宜的標本抽出法を用いた。病棟にて研究協力依頼文書の掲示を行ってもらい、研究対象条件に合致する方が自由意思で研究協力を志願する方法にて、研究対象者を募集した。

#### 2) 面接方法

内諾の得られた研究対象者に対して、面接日時は、勤務の妨げや負担にならないように研究対象者の希望を確認して決定し、面接時間は 60 分程度とした。面接は研究対象者の勤務する病院内や研究対象者の希望するプライバシーが守られた個室を借用し実施した。面接当日は、研究協力依頼文書を用いて、再度口頭で研究内容を説明し、同意書に署名していただいた。面接時は、自作のインタビューガイドを使用し、超高年初産婦の年齢による課題等を質問した。面接内容は、研究対象者の了承を得て IC レコーダーを用いて録音した。

#### 3) データ収集期間

平成 30 年 9 月～10 月

## 5. 分析方法

作成した逐語録を繰り返し読み全体の文脈と意味を捉え、超高年初産婦の産褥期の課題や特徴に重要と思われる内容を研究対象者の語りから抽出した。抽出した内容はできるだけ研究対象者のありのままの語りを用いてコード化し、類似性と相違性、関連性に従って、カテゴリー化を行った。生成されたカテゴリーの関係を逐語録に戻って検討し、「超高年初産婦に対する産褥期の健康および育児における課題や特徴」として構成した。また、承諾の得られた研究対象者にメンバーチェックを受け、解釈と分析の厳格性を確保した。

## 6. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究目的や意義、研究方法、研究参加における自由意思の尊重と拒否権、不参加でも不利益を被らないことを文書と口頭で説明し同意を得た。また、本研究データは研究目的以外に使用しないこと、プライバシーおよび個人情報の保護、データの管理や処分、研究成果の公表方法、研究に関する質問や意見の連絡方法についても文書と口頭で説明し同意を得た。本研究は、愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（30 愛県大学情第 6-21 号）。

## III. 結果

### 1. 研究対象者の概要（表 1）

20 代後半～50 代前半の助産師 12 名の研究協力が得られた。第三次医療施設での助産師経験年数は、7～18 年（平均経験年数は 9 年 6 ヶ月）で、アドバンス助産師の有資格者は 10 名、母性看護学専門看護師は 1 名であった。

### 2. 助産師が捉える超高年初産婦の産褥期の課題と特徴（表 2）

助産師が捉える超高年初産婦の産褥期の健康・育児における課題として、【疲労困憊しやすく、身体がついていかない】【育児に向き合うためのこころの余裕がない】【育児がごちない】【身近なサポートが少なく、孤立しやすい】【高年齢であることをベースに様々な背景が絡み合っている】の 5 つのカテゴリーが、特徴として【長い人生経験を積み重ねた上でのやり方を貫こうとする】【考えてきたやり方ではうまくいかないことに自信を失い、思い知らされる】【自身の特徴を理解し、課題を捉えているため、産後の生活に適應できる】の 3 つのカテゴリーが抽出された。それらは、25 のサブカテゴリー、131 のコードで構成された。以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは『』、コードは [  ]、末尾のアルファベットは研究対象者を示す。また、研究対象者の語りは「斜体文字」で示す。

#### 1) 【疲労困憊しやすく、身体がついていかない】

このカテゴリーは、助産師の捉える身体的課題を示す。「*出血多かったりっていう身体的なダメージも若い人と比べると本当に強い（E）*」との語りのように、出産での合併症を併発し易く、それに伴うダメージが大きく、『*出産直後から疲労困憊している*』。また、『*直母も頻回でやるけど、そうすると息切れしてきたり、血圧が上がったり（F）*』との語りのように、超高年初産婦には一般的な育児法は体力的に困難なこともあり、合併症の悪化や新たな病気の引き金になることもあるため、『*若い褥婦と同様の育児を行う体力がなく、血圧上昇などの症状も現れる*』と捉えていた。

表 1 研究対象者の概要

	年齢	最終学歴	第三次医療施設の助産師経験年数	アドバンス助産師	その他
A	30代後半	大学	13年6ヶ月	有	
B	40代後半	専門学校	8年6ヶ月	有	
C	20代後半	専門学校	7年3ヶ月	無	
D	30代前半	大学	9年5ヶ月	有	
E	50代前半	短期大学	18年0ヶ月	有	
F	30代後半	大学	12年6ヶ月	有	
G	30代前半	大学	9年6ヶ月	有	
H	30代後半	専門学校	8年6ヶ月	有	
I	30代後半	大学院	16年6ヶ月	有	母性看護専門看護師
J	30代前半	大学	8年3ヶ月	有	
K	30代後半	専門学校	10年6ヶ月	有	
L	30代前半	大学	7年0ヶ月	無	

助産師が捉える 40 歳以上の高年初産婦における産褥期の課題と特徴

表2 助産師が捉える超高年初産婦における産褥期の課題と特徴

カテゴリー	サブカテゴリー
疲労困憊しやすく、 身体がついていかない	出産直後から疲労困憊している 若い褥婦と同様の育児を行う体力がなく、血圧上昇などの症状が現れる
育児に向き合うための こころの余裕がない	産後の身体回復が遅く、自身のことで精一杯である 仕事など赤ちゃん以外に気になることがある 妊娠中からずっと自分はハイリスクであると強く感じている 長い不妊治療の経験により、出産がゴールになっている 思い描いていたお産と、実際のつらかったお産とのズレを消化できない
育児がぎこちない	頭でわからないと先に進めない 今までのやり方をうまく変えられない 育児手技がぎこちない
身近なサポートが少なく、 孤立しやすい	家族のサポートが少ない中で、長い育児をせざるを得ない 気軽に相談できる人が周りにいない 使用するサポートから収集した不確かな情報に戸惑う
高年齢であることをベースに 様々な背景が絡み合っている	年齢が一つ上がるにつれて、ハイリスクになる段階が上がる 一括りでハイリスクである 様々な背景が絡み合っている
長い人生経験を積み重ねた上での やり方を貫こうとする	母親としての高い理想を掲げる 母親である自分が無理をしてでも育児を頑張る 一人で何とか育児できるだろうと考える 自分の思うように育児をしたい
考えてきたやり方では うまくいかないことに自信を失い、 思い知らされる	完璧な育児手技を目指しているため、自信を持ってない 自分の頑張りだけでは何ともならないことに直面し、思い知らされる
自身の特徴を理解し、 課題を捉えているため、 産後の生活に適応できる	マイペースに育児をやっている 自身の課題をわかっている もしかしたらこの子だけかもしれないと思い、楽しみながら育児をする

2) 【育児に向き合うためのこころの余裕がない】

このカテゴリーは、身体・社会的問題や妊娠前から継続している思いなどから育児に向き合うためのこころの余裕がないという産褥期の心理的課題を示す。「育児に切り替わった時に、100%育児に気持ちが向かない。身体が戻らないっていうのもあるし(C)」との語りのように、自分自身の体調が元に戻らないことの方が気がかりで、『産後の身体回復が遅く、自身のことで精一杯である』。また、「社会的地位があるので、目の前にある育児ではなくて、自分の社会的な方になってしまう(I)」との語りのように、仕事などの社会的役割を担っており、育児だけに集中できないことがあるため、『仕事など赤ちゃん以外に気になることがある』。さらに、「“私、ハイリスクなんです”って言って、不安を表現する方も多い(K)」との語りのように、高年齢であることをとても意識しており、『妊娠中からずっと自分はハイリスクであると強く感じている』。そして、「不妊治療された方は、出産がゴールで一息ついてやっと育児ができる(C)」という語りのように、長期的に不妊治療をしてきた場合、出産することが目標で、育児に向き合うには時間がかかり、『長い不妊治療の経験により、出産がゴールになっ

ている』ことは多くの助産師が捉えている課題であった。その他、「安産でも彼女(超高年初産婦)たちから見たら違うお産だった場合、そのズレが後に響いてそのことを消化しにくい(I)」との語りのように、『思い描いていたお産と、実際のつらかったお産とのズレを消化できない』ため育児に向き合う余裕がないことも捉えていた。

3) 【育児がぎこちない】

このカテゴリーは、育児習得に関する課題を示す。「赤ちゃんは自分の思い通りにならないってことを理解するまでが難しい(G)」との語りのように、育児手技自体の習得が遅いだけでなく、育児は思い通りにいかないものだと納得するにも時間がかかるため、『頭でわからないと先に進めない』。また「今までのキャリアもあるし、なかなか人の言うことを受け入れられない(E)」など、柔軟に対処することが難しく『今までのやり方をうまく変えられない』。さらに、「不器用な人が多くて。抱っこするにも不自然でぎこちない(H)」との語りのように、若い褥婦と比べて『育児手技がぎこちない』と捉えていた。

## 4) 【身近なサポートが少なく、孤立しやすい】

このカテゴリーは、退院後のサポート不足を中心とした産褥期の社会的課題を示す。「ご主人も会社でそれなりのポストにいることが多いし、親も70代で孫の世話をフルに見れない(E)」など、夫は仕事で忙しく、親は高齢であるなど、家族のサポートが少ないことから、『家族のサポートが少ない中で、長い育児をせざるを得ない』。また、同世代の友人は何年も前に出産しているため「同世代の友人と育児の悩みを共有しにくい」ことや、自身の子どもと同年齢の母親はずっと年下なため「周りのママには相談しにくく、自分だけ孤立しやすい(L)」など、『気軽に相談できる人が周りにいない』ことが挙げられる。そのためSNSの情報に依存しがちで、「みんな良いことを発信しているから、そっちに引っ張られていく(D)」傾向があり、加えて親からの昔の育児情報等、『使用するサポートから収集した不確かな情報に戸惑う』ことがあると捉えている。

## 5) 【高年齢であることをベースに様々な背景が絡み合っている】

このカテゴリーは、産褥期の課題は高年齢だけでなく様々な背景がもたらすことを示す。「高年初産って42歳からっていうイメージで、お産も長引いた結果カイザーになる人も多い(G)」、「やっぱり45歳を過ぎると構える(A)」など、超高年初産婦の中でも、『年齢が1つ上がるにつれて、ハイリスクになる段階が上がる』と捉える助産師がいる一方、「40代のお産は本当に命懸け(L)」との語りのように、やはり超高年初産婦は『一括りでハイリスクである』と捉える助産師もいた。さらに、「仕事のキャリアだったり、不妊治療が長かったりとか、家族の介護とか。早く妊娠したかったけど40歳を超えてしまったっていう人もいた(A)」、「40歳以上ってなるといろんな要素が絡み合ってくるので。それまでの社会背景とか(E)」など、長い人生において多くの経験をしてきており、不妊治療歴、職歴、家庭状況などの背景と、高年齢であるハイリスク要因が複雑に関わってくるため、『様々な背景が絡み合っている』と捉えている。

## 6) 【長い人生経験を積み重ねた上でのやり方を貫こうとする】

このカテゴリーは、経験を積み重ねてきた超高年初産婦ならではの育児に対する向き合い方の特徴を示す。「母乳育児をやりたいと思ったら、とにかく頑張らなきゃいけないって思っている(A)」との語りのように、助産師が難しいと考える育児を行おうとする

など、『母親としての高い理想を掲げる』。また、「自分の身体はさておき赤ちゃんを守らなければっていう責任感(L)」など、理想の母親像のように育児をしなければならないと強い責任感を持っていたり、スタッフへ遠慮して言い出せないこともあり、『母親である自分が無理をしても育児を頑張る』。さらに、「私にもできないわけじゃないとか、プライドもある(K)」との語りのように、今まで自立してやってきたため、『一人で何とか育児できるだろうと考える』。そして、「今まで培ってきた対処法ややり方を確固たるものとして持っていて(I)」など、誰にも譲れない自分のやり方というものがあり、『自分の思うように育児をしたい』と捉えている。

## 7) 【考えてきたやり方ではうまくいかないことに自信を失い、思い知らされる】

このカテゴリーは、超高年初産婦が考えてきたやり方ではうまくいかないことによって湧き上がってきた思いの特徴を示す。「できるだろうと思っていたことがうまくいかないと、悶々としているなって。大丈夫かなって言って帰る人が多い(G)」など、家族のサポートが少ないため、育児手技が大体できている程度では不安に思う気持ちが退院直前に湧いてくるため、『完璧な育児手技を目指しているため、自信を持ってない』。また、「子育てってなると思い通りにいかないことばかりだから、何で寝ないんだろうとか、40代だとそこでつまずいちゃう方が多い(F)」との語りのように、思うようにならない自身の身体や育児によって、頑張ればできるという仕事などでの経験値が否定されたように感じ、『自分の頑張りだけでは何ともならないことに直面し、思い知らされる』と捉えている。

## 8) 【自身の特徴を理解し、課題を捉えているため、産後の生活に適応できる】

このカテゴリーは、課題を抱えながらも自身の強みを活かし、産後の生活を楽しめる超高年初産婦もいるという肯定的な特徴を示す。「全体を把握するまでに時間はかかるんだけど、自分のペースで段取りしていける(L)」など、こうしたいという思いに沿って、『マイペースに育児をやっている』。また、「自分の強いところ、弱みを知っている(L)」との語りのように、高年齢によるリスク、また自身の性格やサポートの少なさなどの現状を受け止めており、『自身の課題をわかっている』。そして、「赤ちゃんの可愛がり方が優しいし、温かいですよね。年齢を重ねている方のほうが…(G)」との語りのように、やっとできた子だから

この子を大事にしたいと思い、『もしかしたらこの子だけかもしれないと思い、楽しみながら育児をする』と捉えている。

#### IV. 考 察

##### 1. 助産師が捉える超高年初産婦の産褥期の課題

超高年初産婦への支援の経験が豊富な助産師は、超高年初産婦の産褥期の課題として、【疲労困憊しやすく、身体がついていかない】、【育児に向き合うためのこころの余裕がない】、【育児がぎこちない】、【身近なサポートが少なく、孤立しやすい】という身体的、心理社会的な、また育児習得に関する課題があると捉えていた。これらの産褥期にみられる課題は、先行研究<sup>11)</sup>で示されていることに一致していた。先行研究で明らかになっている課題は、高年初産婦への調査から示されたものであったが、本研究は、助産師への調査を行った物であり、助産師の視点からこれらの課題を抽出することができた。また、超高年初産婦に焦点を当てており、超高年初産婦の課題は、【高年齢であることをベースに様々な背景が絡み合っている】ことが特徴として挙げられていた。つまり、超高年初産婦は、40歳を超え、年齢と共に複雑化していく課題を有していることが、助産師の語りから明らかとなった。

また、不妊治療にて妊娠した40歳以上の者は31.3%であり、40歳未満の15.4%と比べて有意に不妊治療歴が多いという背景があり<sup>17)</sup>、超高年初産婦は『長い不妊治療の経験により、出産がゴールになっている』ことを多くの助産師が捉えていた。不妊治療を経て妊娠した初産婦の産褥期の体験として、不安や気がかりがあるたびに不妊治療を思い出し、結びつけて心配することがあり<sup>18)</sup>、超高年初産婦が不妊治療における喪失体験などを乗り越えられず、悲しい経験によるわだかまりがあることから、産褥期もその思いを抱えたままであることが考えられる。日本助産師会<sup>19)</sup>では、助産師は母子のみならず、女性の生涯における性と生殖にかかわる健康相談や教育活動を通して家族や地域社会に広く貢献すると定義している。よって、周産期だけでなく、女性の一生に関わることができる助産師は、超高年初産婦が不妊治療等でわだかまりのある思いを聴くことができると考えられる。しかし、超高年初産婦が抱えている思いを助産師へ容易に表出できないことも考えられる。中沢ら<sup>20)</sup>は、産後の入院中の高年初産婦の体験として、看護職者に言いたいことがあっても言えないと思ったことや、もっと聞きやすくしたり褒めて自信をつけて欲しいと思ったことなどが挙げられており、看護職者の関わり

に不満を抱くことを述べている。このように、超高年初産婦も助産師に言い出せないことが考えられる。本研究では、「超高年初産婦は、自分より年上なので」という助産師の語りが多く見られ、助産師は超高年初産婦の年齢を気にして関わっていた。超高年初産婦が助産師の年齢を意識しているという先行研究は見当たらなかったが、長年の人生経験がある超高年初産婦は、年下の助産師へ相談することに抵抗があるのではないかと考える。今回の研究対象者は、超高年初産婦への支援の経験が豊富な助産師に限ったが、このうち12名中10名が39歳以下であった。また全国の病院の勤務助産師のうち39歳以下の助産師は約6割である<sup>21)</sup>。よって、第三次医療施設の産科の勤務助産師は超高年初産婦より年下の助産師も多いと考えられるため、超高年初産婦は助産師への相談をためらうこともあると考えられる。また、高年齢もしくは初めて出産した者は、出産後1年間の自殺率が高いという結果が報告されている<sup>22)</sup>。よって、超高年初産婦は、一見課題がないように見えても、産褥期に様々な背景が絡み合っ出てきた課題を、誰にも言い出せず一人で抱え込む傾向が強いのではないかと考えられる。そのため助産師は、超高年初産婦が抱えている思いを見逃さずに課題を捉えていく必要があると考える。

##### 2. 助産師が捉える超高年初産婦の産褥期の特徴

助産師は産褥期の課題を捉えるだけでなく、その課題に対して、超高年初産婦がどのように行動していくかという特徴も捉えていた。超高年初産婦は、【長い人生経験を積み重ねた上でのやり方を貫こうとする】ことにより、【考えてきたやり方ではうまくいかないことに自信を失い、思い知らされる】場合と、【自身の特徴を理解し、課題を捉えているので、産後の生活に適應できる】場合が挙げられた。このように、助産師が捉えた産褥期の超高年初産婦の特徴から、超高年初産婦は、長年の経験によって生み出された信念を持っていることが見受けられた。先行研究においては、助産師は超高年初産婦をプライドが高く、こだわりが強いと捉えられていた<sup>23)</sup>。その一方で、超高年初産婦は自身が経験していることの意味を見出し、育児で直面している困難も克服できる強みがある<sup>24)</sup>とも言われている。超高年初産婦の中でも『母親である自分が無理をしてでも育児を頑張る』などのように自身のやり方を貫こうとする者もいたり、『マイペースに育児をやっていける』などのように産後の生活に適應できている者もいるが、いずれにしても助産師は、超高年初産婦がそれぞれ持っている強みも見出しながら、産褥期の支援を行っていく必要があると考える。

### 3. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、1 地方都市の 2 施設から得られたデータに基づいて分析を行っており、その施設が有する特徴の影響による偏りが生じている可能性を否定できない。今後は施設数を増やしてデータ収集し、より汎用性の高いものとしていく必要がある。

### V. 結 語

12 名の助産師を対象に半構造化面接を行った結果、超高年初産婦に対する産褥期の健康および育児における課題と特徴について、以下のことが明らかとなった。

助産師が捉えた超高年初産婦の産褥期の課題として、【疲労困憊しやすく身体がついていかない】、【育児に向き合うためのこころの余裕がない】、【育児がごちない】、【身近なサポートが少なく、孤立しやすい】ことが挙げられ、【高年齢であることをベースに様々な背景が絡み合っている】。また、超高年初産婦の特徴として、【長い人生経験を積み重ねた上でのやり方を貫こうとする】ことにより、【考えてきたやり方ではうまくいかないことに自信を失い、思い知らされる】場合と、【自身の特徴を理解し、課題を捉えているため、産後の生活に適應できる】場合があると見出された。

### 謝 辞

本研究にご協力いただきました助産師の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

(本研究は 2018 年度愛知県立大学大学院修士論文を一部加筆・修正したものであり、第 60 回日本母性衛生学会学術集会に一部発表した)

### 利益相反

本論文内容に関する利益相反事項はない。

### 文 献

- 厚生労働省：母の年齢（5 歳階級）・出生順位別に見た出生数。令和 3 年人口動態統計（確定数）の概況，2022 ([https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei21/dl/08\\_h4.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei21/dl/08_h4.pdf)) (アクセス：2023 年 12 月 8 日)
- 厚生労働省：出生順位別に見た母の年齢（5 歳階級）・年次別出生数。令和 3 年人口動態統計（確定数）の概況，2022 (<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003411607>) (アクセス：2023 年 12 月 8 日)
- 夫律子：加齢と妊娠。村田雄二（編），産科合併症，東京，メディカ出版，pp687-691，2013。
- 笠井靖代，尾崎倫子，山田学，他：年齢因子は分娩に影響するか。日本周産期・新生児医学会雑誌 48：585-594，2012
- 永井康一，青木茂，持丸綾，他：初産婦における母体年齢と妊娠予後の検討－高年初産の定義は見直すべきか－。関東産婦誌 50：37-42，2013
- 栗林ももこ，笠井靖代，有馬香織，他：年齢階層別の妊娠・分娩リスクについての解析。日本周産期・新生児医学会雑誌 51：2009-1017，2015
- 小塚良哲，阿部恵美子，横山真紀，他：当院における 40 歳以上の高齢妊娠の検討。現代産婦人科 64：105-109，2015
- 森恵美，前原邦江，岩田裕子，他：分娩施設退院前の高年初産婦の身体的心理社会的健康状態：年齢・初経産別の 4 群比較から。母性衛生 56：558-566，2016
- 種元智洋，野口大斗，速水恵子，他：高齢妊娠と帝王切開。産婦人科治療 103：362-368，2011
- 堀江美幸，小川正樹，松井英雄：本院における生殖補助医療と高齢妊娠との関係に関する後方視的検討。東京女子医科大学雑誌 85：138-143，2015
- 森恵美：高年初産婦に特化した産後 1 か月までの子育て支援ガイドライン。2014 ([http://www.n.chiba-u.jp/mamatasu/doc/guidelines\\_fix.pdf](http://www.n.chiba-u.jp/mamatasu/doc/guidelines_fix.pdf)) (アクセス：2023 年 12 月 8 日)
- 寅嶋静香，遠藤紀美恵，澤田優美：産後 2～9 か月にある女性の身体的健康状態における実態調査第一報～高齢出産群と他年齢出産群との比較から～。母性衛生 57：297-304，2016
- 島山矢住代，藤城優子，松井弘美：40 歳以上の初産婦が産後 1 か月間に受けたサポートと求めるサポート。母性衛生 56：523-530，2016
- 藤岡奈美，亀崎明子，河本恵理，他：初産婦が産褥早期に育児困難感を抱く要因－出産後から 5 日間の短期縦断調査より－。母性衛生 54：563-570，2014
- 藤岡奈美，亀崎明子，河本恵理，他：出産後 5 日間のストレス詳細とストレス反応の経時的变化。母性衛生 55：78-85，2014
- 中沢恵美子，森恵美，坂上明子：35 歳以上で初めて出産した女性の産後入院中における母親としての経験。日本母性看護学会 13：17-24，2013
- 野口聡一，菊井敬子，中田高公：当院における 40 歳以上の妊婦の検討。現代産婦人科 62：29-33，2013
- 勝村友紀，神谷摂子，恵美須文枝：不妊治療を経て妊娠した女性の第 1 子妊娠期から産褥期・育児期までの体験。日本助産学会誌 28：218-228，2014

- 19) 日本助産師会：助産師の定義. 助産師の声明・綱領, (https://www.midwife.or.jp/midwife/statement.html) (アクセス：2023 年 12 月 8 日)
- 20) 中沢恵美子, 森恵美, 坂上明子：35 歳以上で初めて出産した女性の産後入院中における母親としての経験. 日本母性看護学会 13：17-24, 2013
- 21) 厚生労働省：就業助産師数, 実人員一常勤換算・就業場所・年齢階級別. 令和 2 年度衛生行政報告例, 2020 (https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450027&tstat=000001031469&cycle=7&tclass1=000001161547&tclass2=000001161548&tclass3=000001161550&stat\_infid=000032156330&tclass4val=0) (アクセス：2023 年 4 月 18 日)
- 22) 厚生労働省, 研究班：人口動態統計 (死亡・出生・死産) から見る妊娠中・産後の死亡の現状. 2018 (https://www.ncchd.go.jp/press/2018/maternal-deaths.html) (アクセス：2023 年 12 月 8 日)
- 23) 三加るり子, 西村香織, 工藤里香, 他：40 歳以上の高年初産婦に特化した産後 2 週間健診における助産師の視点と支援. 母性衛生 63：293-301, 2022
- 24) Sakajo A, Mori E, Maehara K, et al: Older Japanese primiparas' experiences at the time of their post-delivery hospital stay. International Journal of Nursing Practice.20：9-19, 2014.

## 抄 録

**目的：**助産師が 40 歳以上の高年初産婦（以下，超高年初産婦）の産褥期の健康および育児の課題と特徴をどのように捉えているのかを明らかにすることである。

**方法：**超高年初産婦への産褥期ケアの経験をもつ第三次医療施設の産科病棟経験 5 年以上の助産師 12 名を対象に，半構造化面接によりデータ収集を行い，質的帰納的に分析した。

**結果：**助産師は，超高年初産婦の産褥期の課題として，【疲労困憊しやすく，身体がついていかない】【育児に向き合うためのこころの余裕がない】【育児手技がぎこちない】【身近なサポートが少なく，孤立しやすい】【高年齢であることをベースに様々な背景が絡み合っている】と捉えており，【長い人生経験を積み重ねた上でのやり方を貫こうとする】が，【考えてきたやり方ではうまくいかないことに自信を失い，思い知らされる】特徴があると捉えていた。一方【自身の特徴を理解し，課題を捉えているので，産後の生活に適応できる】といった超高年初産婦ならではの強みを活かし産後の生活を楽しむといった肯定的な特徴も捉えていた。

**結論：**助産師は，超高年初産婦の個々の課題や特徴に合わせて，さらに強みを活かして支援していく必要がある。

**キーワード：**高年初産婦，助産師，産褥期，課題，特徴